

連載
〈魔のない世界〉からの追放／解放
第1回 「家庭教育」から社会学へ

鈴木弘輝
Suzuki Hiroki

Mobile Society Review 未来心理 [12号] 掲載
2008年6月25日発行

はじめに

『日本の『現代社会』はどのような特徴を持っているのか』といった疑問など、今の若者たちはもう持っていないのかもしれない。例えば、『なぜ若者は「半径1m以内」で生活したがるのか?』（講談社+α新書）の著者であるエッセイスト・大学講師の岸本裕紀子によれば、今どきの大学生は大所高所から社会を論じるのは苦手だが、身近なところから時代を感じ取る繊細な感性には大変に優れているのだという。この意見には、私自身も塾・高校・大学で講師をしている経験から賛成である。

私が心配しているのは、これからそういった主題で文章を展開しても、結局は若者の「半径1mの外」に追いやられてしまうのではないかとということである。しかし、「社会学者」という立場からこの状況を見た場合、それでも「そのような状況に若者を追い込む『現代社会』の特徴は何か」という関心を持たずにはいられない。たとえば、それが肝心の若者たちに相手にされなくても、である。ということで、本連載はそのような「ささやかな覚悟」の上で書かれるものである。

議論に入る前に、全体のタイトルについてふれておきたい。これには、本連載が日本の「現

解放からの追放 魔のないうちへ

第1回 「家庭教育」から社会学へ

鈴木弘輝

代社会』の特徴を考察する際のスタンスが含意されている。〈魔のないうちへ〉というのは、後述するように「近代社会」の特徴を示した社会学用語である。「現代社会」を考察するにはその前の「近代社会」の特徴を明らかにする必要がある。日本の「現代社会」の考察には、「近代（明治期〜一九七〇年代末）」から「現代（一九七〇年代末〜現在）」への「歴史的变化」を見るのが欠かせない、と私は考える。

そして、その上で「現代」とは「人々が『近代』から追放された時代」であり、同時に「人々が『近代』から解放された時代」とあるという「現代社会」の両面性を論じたいと考える。そのため、第一回は「追放」の面を、第二回で「解放」の面を取り上げ、第三回はその両面の往復を論ずる予定である。本連載はそのようなスタンスの下で試みられていることを、予めご承知いただきたい。

『家庭教育』の現状から見える母親の「葛藤」

『日本の『現代社会』の特徴を考察する』ことを目指すにあたり、最初に取り上げる著作は、教育社会学者の本田由紀による『家庭教育の隘路』（勁草書房）である。ここでいう「家庭教育」とは「家庭における子育て」のことを

指すが、それは単に我が子の身の回りの世話を焼くだけではなく、学校での学習状況・塾や予備校への通学・入学試験の結果といった我が子の様々なライフイベントへの積極的な関与なども含まれている。そして、本田はここで日本の「家庭教育」の現状を調査研究しており、次なることを明らかにしている。それは、各母親が精一杯「家庭教育」を実践しているにもかかわらず、その家庭間では「階層差」に強く連動した「格差」が生じており、さらに各家庭の中で母親が子育てに関する様々な「葛藤」を抱えているということである。

そのうち、ここでは私の関心にしたがって「葛藤」について補足しよう。本田は二〇〇六年実施の「母親三九人へのインタビュー調査」を通じて、母親の「葛藤」には二種類あるとしている。一つめは、「母親の自己実現や就労」と『家庭教育』との葛藤である。それは、「子育てだけをしているときの社会からの隔絶感や息苦しさ」や「自分だけの時間や自分らしさへの願望」と「子育てへの義務感」との間で起こるものである。二つめは「子育てのあり方をめぐる葛藤」である。それは、「全力で子育てに励みたい」と考えているものの、「激変する社会状況の中で、あるべき子育て像・母親像」が不明瞭になっていることから、「これでいいのか、十

分なのか、どうすればいいのか」という疑問に
絶えずかられているというものである。そして、
本田によれば、一つめよりも二つめの方が「葛
藤」はより深いという。

また、この著作にはもう一つの調査分析が載
せられている。本田は二〇〇五年実施の「母親
の子育てのあり方」に関する量的調査（満一五
〜二九歳までの子の母親七五〇〇人を対象とす
る）の分析を通じて、母親の子育ては「きつち
り」「タイプ」と「のびのび」タイプに分類され
ると論じている。この場合の「きつちり」とは勉
強や生活習慣を厳格に求める「教育ママ」的な
ものであり、「のびのび」とは遊び・体験・希望・
意見の表明を重視する「ゆとり教育」的なもの
である。

次に、子育てのタイプの違いが子どもの将来
や母子関係に与えた影響の分析を通じて、「き
つちり」は子どもの「好成绩・高学歴・高収入」
に結びついているが母子関係は疎遠になり、「の
びのび」は子どもとの良好な関係を作るにはよ
いが社会的地位の上昇には結びつかないと論じ
ている。そして、本田自身はこの「二律背反」
を「子育てに関する本質的なもの」と捉えてお
り、先の「子育てのあり方をめぐる葛藤」はこ
の「きつちり」と「のびのび」をめぐるものだ
としている。

本田は以上のような調査結果を踏まえながら、
現代の母親たちが逃れがたい「葛藤」を抱えて



岸本裕紀子著 (2007) 『なぜ若
者は「半徑1m以内」で生活した
がるのか?』(講談社+α新書)



本田由紀著 (2008) 『家庭教育
の隘路』(勁草書房)



広田照幸著 (1996) 『日本人の
しつけは衰退したか』(講談社現
代新書)

いることを指摘し、現代における「家庭教育」
のあり方に警鐘を鳴らす。「家庭教育」の重要
性を喧伝する現在の政策的・社会的動向は「格
差」と「葛藤」をさらに助長すると主張し、教
育に関する家庭・母親の負担を公共的に家庭外
の社会で広く担えるような諸政策の実施を要求
するのである。

以上のような主張に対しては私も全く異存は
なく、「適切な教育政策」の実施要求に茶々を
入れるつもりも全くない。ここで私がとるのは
別の論点であり、それは本田の調査研究で明ら
かになった「現代の母親」が抱く「葛藤」につ
いてである。なぜなら、このような「葛藤」の
意味を掘り下げていくことによって、「適切な
教育政策」に還元されない「現代固有の状況」
を考察することができるからである。

『教育ママ』に不安を感じる「現代の母親」

先の本田の研究でも「きつちり」した子育て
というかたちで析出されたように、「現代の母
親」が抱く「葛藤」の背後には「教育ママ」と
いう「理想の母親像」があると考えられる。教
育社会学者の広田照幸によれば、この「教育マ
マ」と呼ばれる母親像は大正時代頃から登場し、
一九六〇年代後半までに日本社会の大半に浸透
していったという（『日本人のしつけは衰退し
たか』講談社現代新書）。つまり、これはもは

や「伝統的な『理想の母親像』とささえいえる
のである。では、それはどのような特徴を持っ
ているのだろうか。ここでは、昭和初期に小説
というかたちで描かれた「近代の教育ママ」を
参照することによって、その特徴を把握するこ
ととする。

「近代の教育ママ」がどのようなものかを知
るために参照するのは、鶴見祐輔の小説『母』
(一九二九年刊行)である。それは、貧しく低
学歴の主人公・朝子が、旧制一高から東京帝大
法科へというエリートであり銀行財閥の御曹司
でもある大河澄男と結婚した後、夫の急死とい
う悲劇に見舞われる中で、息子の進に対する「教
育ママ」になっていくという物語である。その
中に、進が朝子の期待通り旧制一中に一番で合
格したことで、朝子はテーブルに突っ伏してす
すり泣くというシーンが登場する。そして、進
はその様子に総身のしびれるような感激を覚え、
朝子の自分に対する「母の慈愛」を強く心に刻
むのである。

このように、主人公の朝子は「教育ママ」と
いう「役割」を全うすることによって、息子に
対する愛情を「母の慈愛」として息子に実感さ
せることに成功している。「教育ママ」として
の朝子は全く動揺することなく、自らの「役割」
を十全に遂行することによって、「教育ママ」と
しての愛情を表現しきっているのである。

もちろん、これは「小説」であり事実ではない。

しかし、一九二九年にこの本がベストセラーとなったことから、このような母親像が当時の人々の一部に対してであれ、好意的に受け止められていたと想定できるだろう。すなわちこの小説は、「近代の教育ママ」として十全に生きた「朝子の人生」を描いているのである。

そして、このような「朝子の人生」と本田の研究結果を比較することによって、「近代の母親」と「現代の母親」がどのような点で異なっているのかを推測することができる。それは、「朝子」が「教育ママ」という役割を果たすだけで十分だったのに対して、「現代の母親」は「きつちり」＝「教育ママ」(＝伝統的な「理想の母親像」)と「のびのび」＝「ゆとり教育」の間で「葛藤」しているということである。では、「きつちり」と「のびのび」の違いは何か。それは、単に「教育方針の違い」ではなく、「母子関係の良好さを継続できるか否か」という点に見られる。本田の指摘によれば、「きつちり」した子育てでは母子関係が疎遠になるというのである。

そして、このことから私が考えるのは、「きつちり」した子育てが母子関係を疎遠にするのと同じに気づいた「現代の母親」たちは、純粹に「教育方針」としてというよりも、「子との良好な関係を持続したい」と思うがゆえに「のびのび」した子育てとの間で「葛藤」してしまうのではないかというものである。言い換えれば、「現



鶴見祐輔著(1926)『母』(講談社)

このストーリー紹介にあたっては、高田里恵子『プロテックな教育』(ちくま新書)を参照している。高田は「女の子いかに生きべきか」という観点からこの小説を取り上げており、その中で描かれている母と息子の姿「かつての日本人の上昇志向」の原風景を見ている。

代の母親」たちが「きつちり」と「のびのび」の間で「葛藤」してしまうのは、「母子関係の良好さを継続できるか」という点から考えると、伝統的な「きつちり」だけではどうしても不安をぬぐえないからなのではないかということである。仮に「現代の母親」も朝子のように「近代」という時期に生きていれば、「その時々の子との関係の良好さ」など気にせずに済んだかもしれない。しかし、「現代の母親」が現に「きつちり」と「のびのび」の間で「葛藤」していることから見て、彼女たちが「その時々の子との関係の良好さ」を常に気にしているのではないかと推測することができる。

以上のような考察から、私は次のような論点を提示することができる。それは、「自分の愛情が子に伝わっていないのではないか」という不安があるからこそ、「現代の母親」は「葛藤」するのではないかということである。

「現代」という時代に生きる母親たちは、もはや「朝子」のように「いつか自分の愛情が子に届くはず」といった「希望の先送り」へと没入することができないのではないか。それが大切だということは分かっているが、それとは別に現時点での「子との情緒的交流の持続」に対してある程度の確信を持ちたいと思うようになってきているのではないか。つまり、「現代の母親」が抱くようになった「葛藤」の背後には、「教育ママ」という役割に没入することができず、

「自分の愛情が子に伝わっているのか」を常に気にしている母親たちの「不安」があると考えられるのである。

〈魔のない世界〉からの追放

これまでの考察をまとめると、小説『母』の主人公・朝子は「きつちり」した子育てを全うすることに何の疑問も持たなかったのに対して、「現代の母親」たちは「きつちり」と「のびのび」の間で「葛藤」してしまっている。私は、この違いこそ、「近代」と「現代」の違いがあると考え。すなわち、「近代」が「家族内の役割に没入することで安心感を得る」ことが可能な時代であったのに対し、「現代」は「家族内の役割に没入しようとしても不安をぬぐい去れない」時代だということである。以下では、そのような「近代」と「現代」の違いについて、社会的に論じていく。

まず、そのために参照するのが〈魔のない世界〉という語である。この語の基になった「エントツアウバルンク (Entzauberung)」を社会学で使用したのは、ドイツの社会学者である M・ヴェーバーである。ヴェーバーは一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて活躍し、「近代」という時代の特徴を様々な角度から議論した。その中で、「近代社会」が形成される際の意識変化を示す用語として彼が提示したのが、この

鈴木弘輝 (すずき・ひろき) —— 都留文科大学非常勤講師。朝日カルチャーセンター講師。東京都立大学 (社会学) 博士。専攻は理論社会学・コミュニケーション論・歴史社会学。学校や塾で「教育の現場」に関わる一方で、P・ブルデューやZ・バウマンやN・ルーマンといった社会学者の議論を「戦後史」との比較で再解釈するという理論研究を行っている。また、研究者仲間と「現代位相研究所」なる研究グループを作り、自ら「所長」を名乗る。現代位相研究所 <http://www.modernphase.com>

プロフィールは発行当時のものです。

「エントツァウベルンク」である。このドイツ語は、日本語では「魔術からの解放」「呪術からの解放」「脱魔術化」「脱呪術化」などと訳されており、「伝統主義社会」から「合理的な近代社会」へと人々の意識が変わったことを示す言葉として使われてきた。すなわち、西欧近代初期において、それまでの「伝統的な魔術による救い」に縛られることなく「社会的合理的な変革」へと人々が促される際に、その変化を精霊面で後押ししたのが、「魔術からの解放」という人々の意識の変化だったというのである。そして、二〇世紀後半から現在まで社会学者として活躍している見田宗介は『社会学入門』(岩波新書)の中で、このヴェーバーの議論を基に「近代社会」を〈魔のない世界〉であると規定している。では、なぜ見田は「近代社会」を「脱魔術化された社会」とせずに、〈魔のない世界〉としたのか。それは、彼がこの「エントツァウベルンク」というドイツ語にどのような意味を見出しているのか、またそれをキーワードとしたヴェーバーの議論にどのような意味を見出しているのかということと関係がある。

まず、見田は「エントツァウベルンク」の中に含まれる「ツァウベル (Zaubern)」というドイツ語に、「魔術、呪術」という意味の他に「魅力、魅惑」という意味もあることを指摘する。さらには、ドイツの詩人であるF・シラーの詩を参照しながら、この「ツァウベル」という語



見田宗介著(2009)『社会学入門』(岩波新書)



マックス・ウェーバー著(2009)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(岩波文庫)

が「人間と人間とを結び合わせる不思議な力」という意味を含んでいることを強調する。

次に、そのような語の解釈を前置きとした上で、見田はヴェーバーの著作である『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(岩波文庫)の内容に言及する。それによれば、「近代社会」の担い手であったプロテスタンティズム(特にカルヴァン派)において、「エントツァウベルンク」という精神の性向が、どれほど人々を「友情や隣人に対する信頼や家族の愛情」から切り離し、一人一人を孤独な存在として生きさせるようにしたかということ、ヴェーバーは論じているというのである。

見田の考えによれば、ヴェーバーはすでに、「伝統的な魔術による救い」に縛られずに「社会的合理的な変革」が進んでいった「近代社会」の問題点を論じていたという。そして、「エントツァウベルンク」を「脱魔術化」や「脱呪術化」としたのはヴェーバーのそのような視点が隠れてしまっただけで、見田はそれを防ぐために「近代社会」を〈魔のない世界〉としたのである。したがって、見田にとつての「近代社会」とは、「人間と人間とを結び合わせる不思議な力のない社会」であり、「一人一人を孤独な存在として生きさせる社会」である。つまり、「近代」以降の人々は、みな〈魔のない世界〉の中に生きていくことになるのである。しかし、「近代」のまっただ中に生きてきた人々は、「人

間と人間とを結び合わせる不思議な力」がないことで悩むことは「現代」とくらべて少なかったという。なぜなら、「近代」では、「社会の市場経済化」が人々を「友情や隣人に対する信頼」から切り離された領域へと誘っていった一方で、「家族の愛情」は「近代核家族」が専ら担うことになったからである。もっとも、見田によれば、その「近代核家族」は「市場経済化」のさるなる進行の中で解体するしかないものであったのだが。

そして、「現代」とは「市場経済化」が貫徹することによって、社会の中から「人間と人間とを結び合わせる不思議な力」が本当に失われた時代をいうのである。そこでは、「友情や隣人に対する信頼や家族の愛情」はもはや居場所がないといわざるを得ない。「近代核家族」にはまだ「母親の役割」||「きっちり」と「母親の愛情」||「のびのび」を結びつける「不思議な力」が備わっていたが、「現代の家族」にそのような「ツァウベル」はもう望めないだろう。かつての小説『母』のように、母が「教育ママ」「母」を果たしていれば必ずと子が「母の慈愛」を感じてくれるということは、「現代」ではほぼ期待できないだろう。つまり、「現代」においてついに人々の感情は〈魔のない世界〉から追放されてしまったのであり、それが「近代」ではない「現代」固有の位相なのである。